

次回は

第78回「資本論を読む会」

☆8月25日（月曜日）

午後6時30分—Zoomで開催

第5章「流通期間」[岩波文庫(四)p179-]。

7月の「資本論を読む会」はanakさんが入院のため欠席し8名（kai, tab, saya, tak, kat, sak, tib, sug）で開催。

「第4章 循環過程の三つの形」の後半部164頁7行目から読合せ、前回6月に引き続きkatさんからレポートにもとづき報告を受けました。

この章の概略は、「資本は三つの循環を統合して流過程と生産過程を継続的に経過しつつ、自己増殖する価値の運動体であり、その本質は静止物としては理解するものではない」とでも言えるのではないのでしょうか。

次回は8月25日、第5章「流通期間」からです。

議論となった点を以下にピックアップすると、

【P170, 12行目～P172, 後2行目】

これまで、社会的生産の3つの特徴的な経済的運動形態として、自然経済（物々交換）、貨幣経済（硬貨交換）、信用経済（銀行券等交換）と区分してきた。これは、経済の発展段階を表すものではない。交易機能を表す限りでは、発達した資本主義的生産において貨幣経済は信用経済の基礎であるだけであり、自然形態と異なる交易形態でない。

上記レポートの「自然経済」の性格について意見交換がされました。「経済学辞典（大月書店）」によると【自然経済】とは、

現物経済とも訳される。ヒルデブランドは、自然経済・貨幣経済・信用経済という発展段階を唱えた。この場合の自然経済とは、貨幣によらない物々交換の経済のことである。

マルクスは資本論で、この三段階説について、①交易様式による区分としてみれば、信用経済は貨幣経済の一形態に過ぎず、②交易様式としての自然経済とは交換経済に他ならないが、そうだとすると完全に自給自足的な経済は三段階のどれにも属さないことになる、③この区分では資本主義的生産は貨幣流通の範囲の点から貨幣経済としてとらえられるに過ぎない、と批判し交易様式に目を奪われて、その基礎である生産様式の性格を見ないこの区分は、小商売のことで頭がいっぱいのブルジョア的視野にふさわしいとした。

※今回の案内は、anak欠席のため、Sugiさんがまとめてくれました。ありがとうございました。次回のレポーターはKaiさんですね。よろしくお願いします。。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから-Katoちゃん

第4章 循環過程の三つの形(続き)

・流過程の一般的な分析にあたっては、貨幣は金属貨幣(金貨、銀貨等硬貨)を想定する。象徴貨幣(それ自体価値のない流通手段の機能しかない価値商標)や信用貨幣(銀行券)は除外する。金属貨幣は、購買・支払手段と両方の機能があるが、この2巻では購買手段としてのみ機能するものとする。

・一般的商品流通の諸法則が適用するのは、資本の流過程が単純な流通工程をなす場合であって、これらの流通工程が個別産業資本の循環の機能的に規定された諸段階では適用しない。流通工程の系列としては、一般に流過程は商品変態の2つの系列(売り手側と買い手側)に過ぎない。商品変態と他の段階の商品変態との絡み合いは、資本流通についても適用するが、この絡み合いが同時に諸資本の諸変態の絡み合いの表現ではない。

・これまで社会的生産の3つの特徴的な経済的運動形態として自然経済(物々交換)、貨幣経済(硬貨交換)、信用経済(銀行券等交換)と区分してきた。これは、経済の発展段階を表すものではない。交易機能を表す限りでは発達した資本主義的生産において貨幣経済は信用経済の基礎であるだけであり自然形態と異なる交易形態でない。

DAS KAPITAL

